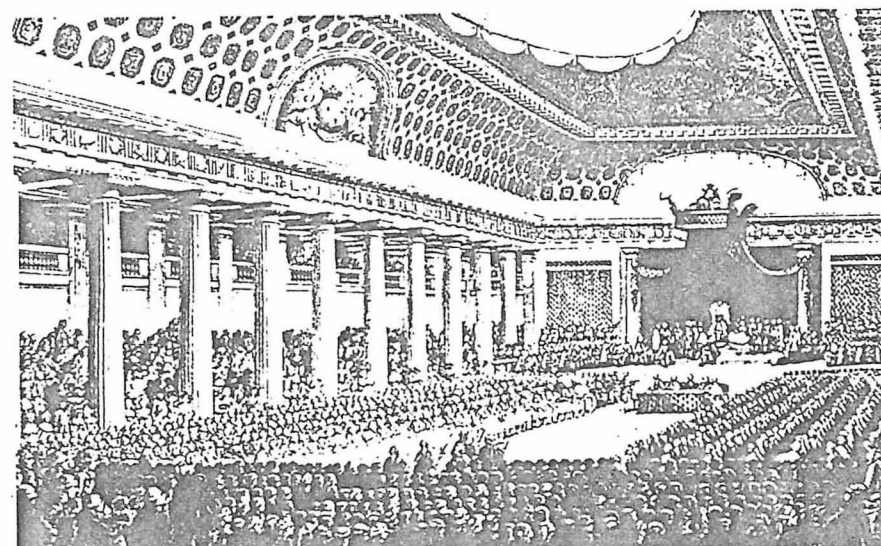




【民主主義は素晴らしいか?】②

民主主義者からの反撃

陳腐で凡庸で苛酷で
抑圧的な民主主義は
人類が生み出した
最高の政治制度である!

民主主義は、理想の天国でも極楽でも何でも無い。
民主主義は、民衆の幸福を必ずしも保証しない。
それはただ、民衆が被る苦痛や悲慘を必要最小限に喰いとめるための、
ギリギリの工夫なのだ!

橋爪大三郎 (東京工業大学助教授)

民主主義。民主政。デモクラシー。

なんと陳腐で、凡庸に響くことばだろう。
ありふれていて、今さら口にするのもおっ
くうで、トレンドーなところがぜんぜん
ない。

ふた昔ともうすこし前、私が駆け出しの
大学生だった頃。当時からもう、民主主義
はさえない古看板だった。戦争直後の輝き
はどこへやら、すっかり陳腐なお題目にな
り下がっていた。年若い私のような学生は、
民主主義などというものをふりかざす「知
識人」たちの口吻に、欺瞞のにおいがかぎ
つて、そんなものは犬に喰われろと思っ
ていた。青年はロベスピエールのように、
生硬な理想主義に走りやすい。社会の真実
を直感する少数者の存在を信じ、それが、
多数者の愚昧に埋もれることを嫌悪するの
である。

*

そういう当時から考えると、私はなんと
遠くへ来たことだろう。

いまの考え方をひと口で言えば、「たかが

民主主義、されど民主主義」(『それでもや

っぱり民主主義がよい)なのである。たし
かに民主主義は、なかみのない空箱、筋書
きのない台本みたいなものだ。でも、だか
らいなのだ。そこでは誰もが、平等な主人
公。愚かな過ちを犯すこともままあるが、
それを改めるチャンスと責任が残されてい
る。これよりましな政治の仕組みを、人類
はまだ、考えついていないではないか。

「政治」って何?

民主主義とはどういう制度のことなのか、
最初にはつきりさせておかないと、話にな
らない。

そこで、民主主義の定義だが、これは、
政治制度の一種である。だからまず、政治
というものをきちんと理解するのが、順序
というものである。

私の考えでは、それは簡単だ。別の機会
にも少しのべたが、政治とは《おおぜいの
人びとを拘束してしまおうようなことがら

決定すること、これにつきる。

おおぜいでなく、自分ひとりしか拘束し
ないようなことを決めても、それを政治と
はいわない。ただの意思決定にすぎない。
また、何かを決めても、人びとがそれに拘
束されないですむなら、やはり政治と考え
なくてもよい。

人間は、社会をつくって、共同生活を営
む生き物である。そうである以上、やむを
えずみんなを拘束することがらを決定する
必要が出てくる。たとえば、どの場所に住
むか。獲物をどう分配するか。ある役目に
誰を選ぶか……。政治は不断に必要とされ
ている。

この意味での政治は、よく考えてみると、
ごく小さな集団のなかにも発見できること
がわかる。夫婦や家族の間でも、つねに政
治の力学が働いているのである。

ふつう「政治」とよばれているのは、全
体社会(ないし、比較的サイズの大きな集
団)で生じる政治のプロセスが、制度化さ
れたものだ。誰が何を、どうやって決める

かを、パターン化したものを、政治制度という。たとえば、王様が法律を決める、酋長が種蒔きの時期を決める、……などがそうである。この意味で、いわゆる「政治」(全体社会の政治制度)は、さつき定義した(広義の)政治の、特殊ケースになっている。

「民主主義」って何ぞ

つぎにいよいよ、民主主義の定義だが、こういうことだと思う。民主主義とは、(関係者の全員が、対等な資格で、意思決定に加わることを原則とする政治制度)をいう。ここで、関係者の全員とは、意思決定の結果に拘束されるようになる人びとすべてのこと。ただし、まだ生まれていない人間(彼らを拘束するようなことがらを決めなければならぬ)も(ある)を、決定に参加させることはできないから、全員といっても「可能的な全員」のことである。また、対等な資格とは、特定の誰かを特別扱いす

ることが、あらかじめ決まっていたりしないことをいう。誰かを特別扱いする(たとえば、特別の権限を持った役目につける)場合には、そのことを、対等な人びとの相談(意思決定)によって決める。その際、その人の権限は、みんなから条件つきで委任されたものであることが、はっきりしていなくてはならない。条件が満たされなくなれば、彼らもと通り特別扱いされなくなる、というわけである。

だから、民主主義は、王政(もしくは君主政)でありえない。王はさまざまな決定を下すが、その権限が、いつどういう条件で彼に与えられたのか、はつきりしない。王とは、だいたいがそういうものなのだ。王の権限に、その社会の人びとがちつとも異論を唱えていない(暗黙に同意を与えている)としても、それは民主主義でない。同じような理由で、寡頭政や貴族政も、民主主義でありえない。

民主主義と全員一致は違う

民主主義と似ているものに、全員一致制がある。

人類学者が「未開」社会を調査してみたり、歴史学者が中世の団体を調べてみたりすると、ものごとを全員一致で決めることになっている場合がよくある。これはなかなか、民主的に見える。

けれども全員一致制では、何かを決めようと思っても、実質的なことはなかなか決められない。めいめいが拒否権を持っているのと、同じだからだ。ゆえにこういう決め方は、政治というより、一種の儀式なのである。自分たちがどうしようもなく運命共同体に加わっていることを、確認するための。

民主主義は、全員一致と違った、決定手続きをそなえている。誰もが対等な資格で決定に加われる手続きは、投票(多数決)なので、民主主義・イコール・多数決、と思



っている人もいる。投票には実際、いろいろなやり方があり、しかも、不合理な結果が生ずる場合のあることが知られている(投票の逆理)。ここでは、詳しい話はとりあえず抜きにして(興味のある読者は、佐伯胖『きめ方』の論理、東京大学出版会、などを参照のこと、全員一致と多数決がどう違うかを、確認しておこう。

多数決は、ひとりひとりが異なった意思(意見)を持っていることが、前提になっている。どんなことを考えようと、何に投票しようとして、それは個人の勝手。めいめいは、いつ自分の意見を変えてもいい。しかしそれを、誰かから強制されたりしない。そして、特に重要なことだが、いったん社会的決定が下された(投票の結果、ある結論になった)あとも、自分のもともとの意見を変える必要がない。決定は全員を拘束するから(政治の定義を参照、どんな意見を持つていようと(少なくとも行動は)それに従わなければならないが、なにを考えるかは、それと関係ない。

それに対して、全員一致制で大切なのは、

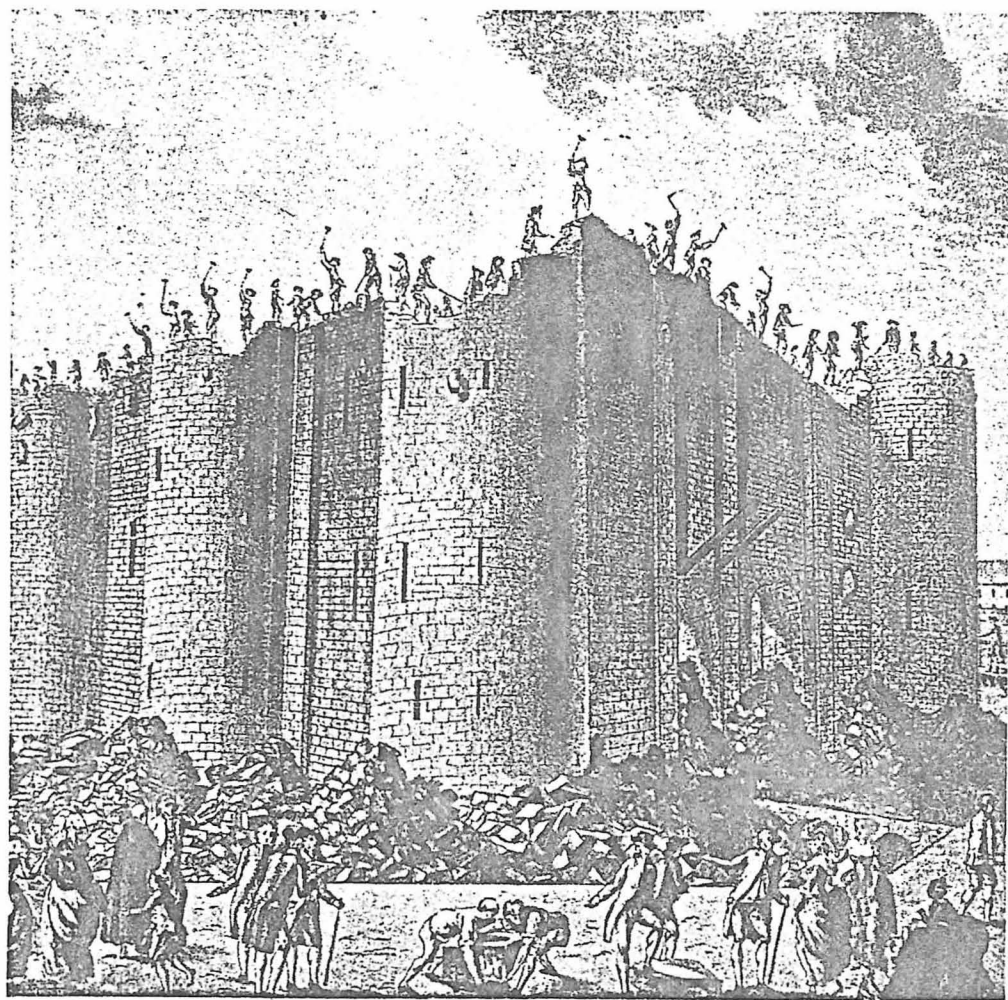
みんなが残らず決定に加わった、という事実のほうである。そして、社会的決定が成立するためには、全員がそれに同意している(少なくとも、反対していない)ことが必要だ。つまり、この制度のもとでは、めいめいがいつまでも自分の意見にこだわっていないで、大勢に一致するようにと、不断の圧力が働く。

このように全員一致制は、民主主義と大変違った前提に立つ。全員一致制は、自立的な個々人を認めない。それに対して、民主主義は、個々人の自由(思想・信条の自由)を最大限、尊重するやり方なのである。

少数意見を尊重するのはなぜ?

民主主義は、少数意見を尊重するようにできている。いったいなぜ、少数意見を、尊重しなければならないのか?

これを、恩恵の一種、みたいに考えてしまふ人がいる。投票の結果、多数意見が勝



かたちだけのものである。まず、事実をはつきり知る。そのうえで、自分なりの価値観に照らして判断を下す。それが意見なのだ。事実を知らされなかったり、事実でないことを事実と思いこまされたりしたら、当然その分だけ、判断はゆがむ。他人の操作が、そこに入りこむ。そんなものは、厳密には自分の「意見」と言えない。事実が人びとのあいだで共有されてこそ、めいめいが自分なりの意見、自分なりの判断をもつことに意味があるのだ。

それゆえ、民主主義は、マスコミなど報道機関の自由な活動と、密接不可分である。報道の自由が確立し、知りたい事実を誰もが自由に知ることができてはじめて、政治がどうあるべきかの判断も下せるわけである。ここで「知りたい事実」には、「誰がどんな意見を持っている(いた)か」、の知識も含まれる。ほかの人の意見も十分参考にしなければ、成熟した意見を持つことはむずかしい。

民主主義を覆そうとする人間がまっ先に

ちを占めた。いまや多数派は、何でもできる。少数意見の持ち主をいじめたり、追い出してしまうもいいのだが、いくらなんでもそれはかわいそうなので、ぐっとこらえて、少数意見を大事にする。要するに、強者が弱者に、手心を加えてやるということだろう。

——というふうに考えてしまったら、んでもない考えちがい。民主主義の原則にいう、少数意見の尊重は、私の理解によると、これとぜんぜん別のことである。

まず前提になるのは、人間は間違う、ということだ。

人間の能力には限りがあるから、判断を誤って、間違った意見をもつことも十分ありうる。個々人がおのおの意見をもっているのは、めいめいの個性によるとも考えられるし、いろいろな間違い(誤謬)を犯しているせいだとも考えられる。

つぎに、この系(コラリー)として、多数意見だから正しいとは限らない、ということが言える。

誤謬を犯す可能性のある人間が、いくら大勢集まったからといって、誤謬の可能性がゼロになりはしない。少数意見より多数意見のほうが、どちらかと言えば正しい、という蓋然性(たぶんそうだろうということ)すら怪しいものだ。ほかに仕方ないから、とりあえず多数意見に従う、という約束ごとが多数決なのである。だから、多数＝正しい、ということとを全然保証しない。

事実、あとから少数意見が正しかったとわかることもよくある。そのときには、多数意見だった人びとが考えを改めればいいのだが、そもそもそういうことができるために、ずっと少数意見をとえ続けていてくれる人が必要だ。どの意見が正しいのかわからないのだから、たくさんの異なった意見の人びとを確保しておくほうが、多数意見の人びとを含むすべての人びとにとって有利なことなのだ。少数意見を尊重するのは、社会にとっての安全策であり、多数者にとっての利益でもある。

少数意見を尊重する、というルールがあ

ってはじめて、安心して討論(発言)できる。このルールは、言論の自由にとって、欠かせないものだ。

人びとは、自由に意見を変えることができる。だから誰だって、いつ少数意見に転落するか、わかったものじゃない。そうなんても、自分の良心(「いったんこうだと思っただけ」を、特に理由もないのに変えないこと)を貫き通すためには、言論の自由、思想・信条の自由が守られていることが重要だ。自分が言ったり、考えたりしたことについて、処罰を受けたり不利益を被ったりしない。これは民主主義の、最低限のルールである。

ジャーナリズムと民主主義

これと関連する重要な問題として、報道の自由(読者、視聴者の立場から言えば、知る権利)がある。

個々人が自由に自分の意見を持てるとしても、もし報道の自由がなければ、それは



考えることは、だから、ジャーナリズムなど言論界の正常な活動を破壊することである。ジャーナリズムと民主主義は、二人三脚みたいなものだから、ジャーナリズムが転べば、民主主義も転んでしまう。逆に言う、民主主義を正常に作動させるために、ジャーナリズムの良心(言論を、言論の価値規準だけによって律すること)は不可欠なのだ(だが、日本の言論人に、このところをほんとうにわきまえている人が、果たして何人いるだろうか……?)。

「民主主義」はフィクションだー

というような、原則的な(だから大事な)問題を、まだまだいくらか議論していけるけれど、ここまででいちおう、民主主義の大枠はわかってもらえたのではないかと思う。そこでつぎに、民主主義がどうしても、一種の制度というか、フィクション(虚構)としての性格を帯びる、という話をしよう。これは民主主義を、実社会のいろいろな場面に活かしていこうとする場合、忘れてはならないことだ。

*

民主主義は、数ある政治制度のひとつであり、(当然のことだが)歴史的に形成されたものである。天然自然に、はおつておいた、社会が民主主義になってしまった、なんていうことは、まかり間違ってもない。くだいようだが、もう一回、強調しておく。民主主義は、人為的な制度(われわれが、意識的に、努力して組み立てていかな

いと、すぐ壊れてしまう制度)である。人為的だから、人間の自然な感情(そんなものがあるとして)に逆らっても不思議はない。なんて憎たらしいことを言う奴、殴りつけてやろう、と思っても、そうはいかない。相手が言論で(手を出さなくて口だけで)やっている限りは。民主主義でやる以上、めいめいに自制が要求される。そういう努力を惜しまず、民主主義を守り育てていかないと、民主主義はすぐ民主主義でないものになってしまう。

民主主義は、われわれがそれを自覚的に選択し、そのあとも日々選択しつづけ、意識的に手をかけてやらないと、すぐ壊れてしまう、もろい制度なのである。

*

憲法や人権宣言などを読むと、たしかに、思想・信条の自由や、言論の自由などの人権は、人類不変の原理であって、何人も奪うことはできない、などと書いてある。こういう「人権」を認めると、そこからストリートに民主主義が導かれる(それ以外の

政治制度は不可能)みたいに見える。

でも、そんなことはちっともないのであって、民主主義とはとても言えないような状態(ファシズム・全体主義や、スターリン主義に、社会がコロッと変化してしまうという例も、つい最近あった。だから、人権宣言に書いてあること(民主主義は、人類不変の原理である、など)は、一種のフィクション(都合のよいように考えついた理屈)なのである。

ただ、この先も考えないといけない。民主主義はただのフィクション、だから絵空事さ、ですませるのでは、民主主義が現実の政治制度として機能している理由がわからなくなってしまう。

正しさの規準は「手続き」にあり

民主主義の原則を一貫した立場として主張してゆくと、どうしてもフィクションを取り入れざるをえない(ところが出てくる)。それはなぜだろう。

それは、民主主義が、「手続きによる正当化」という論理をそなえている(それしかない)からだ。

民主主義であるからには、民衆(人びと全員の意思を汲んで、政治に反映させ、意思決定をしなければならない。ではその意思を、どうやって知るのか? あるひとりの人間の意思を知るのなら簡単だ。本人に訊けばいい。数人の人間の意思を知るのも同じことで、そうむずかしいだろう。けれども、何十万人、何百万人も人間の意思を知るとなると、そう簡単にはいかない。かりに本人たちに訊いてまわったところで、ゴチャゴチャになるのがオチだろう。そこで代わりに、選挙(投票みたいな制度を工夫する。そして、その結果に、人びとの意思が反映されている、と考えることにする。投票結果・イコール・民衆(選挙民)の意思、なのである。

ここまではいいでしょう。さて、人びとの意思が、このように、なんらかの制度を通じて表明されるしかないものとすると、

問題が生じる。制度は、AでもBでも、Cでもありうる。早い話が、選挙制度にしても、中選挙区制も小選挙区制も、比例代表制もありなわけだ。しかしそのどれであるかによって、選挙結果は違ってくる。ということは、(かりに同じ意見を持っている人びとが投票したとしても)制度のいかんで、異なった意思が表示されてしまう、ということになるではないか。

どの制度でもいいのなら、そのどれかでなければいけない理由はない。それは、民衆の意思に何種類もありえて、そのどれが本物なのか決め手がない、ということでもある。これはとても具合の悪いことだ。

こうして、民衆の意思を表明する制度を、どれに決めたらいいのかという問題が生じる。これを解決する、たぶん唯一の方法は、この制度そのものも、民衆の意思によって選択することだろう。

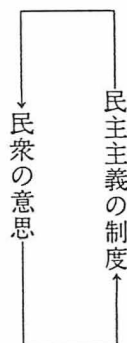
そうすればいちおう、民主主義の原則は首尾一貫したことになる。しかし、ここにまた問題が生じる。制度を選択する民衆の

意思とは、どうやって表明されるのか。それはやっぱり、なにかの制度的な手続き（たとえば投票）によって、表明される以外にあるまい。とすると、問題は、一段先送り（というか、後戻り）しただけで、ちつとも解決になっていないことがわかる。

結論として、こうならざるをえない。民主主義の原則のもとでは、

……↓制度↓意思（選択）↓制度↓意思（選択）↓……

という連鎖が、どこまでも続いていることになる。別の言い方をすれば、民主主義の具体的な制度と、民衆の意思との間に、左図のような循環（自己言及のループ）があることになる。このように、制度と意思が互いに基礎づけあう、という意味で、民主主義は、自己準拠するシステムなのだ。これは、（近代）民主主義の宿命である。

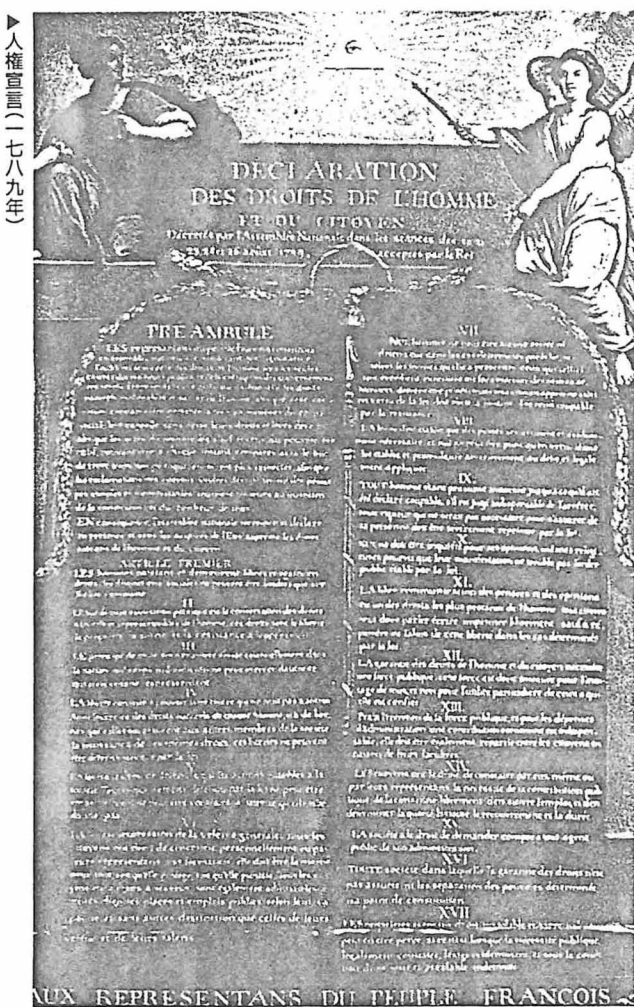


民主主義の内部のどこかに、実体として、正しさの規準があるわけではない。神様とか王様とか、民衆を導く最高権威者、みないな存在がいるわけではない（強いて言えば、民衆だけがそれにあたるだろう）。だからここでは、意思決定を形成するための手続きが正しく踏まれたかどうか、最終的な正しさの規準になる。これが、「民主主義は手続きを重視する」ということのなかみである。

民衆が先か、制度が先か？

するとすぐにわかるように、民主主義は、最初いつたにどうやって始まったのか、ということが疑問になる。

この解決は、二通りしかないはずだ。①制度と無関係に（あるいは制度の外側に）民衆の意思が存在することができると考えるか、それとも、②どんな民衆の意思にも先立ってすでに制度があつたはずだ、と考えるか。この、どちらかなのだ。



人権宣言（一七八九年）

①の解決は、民主主義を選択する巨大な

意思（最初の一步）があつた、と想定する。この意思から出発するのが、社会契約説なのだ。制度のない状態（自然状態）のもとで、人びと（民衆）が集まって、どんな社会をこしらえようかと相談し、契約を交わす。この契約（意思の一致）のうえに、制度が形成されるのだ。本当はそんな契約なんかなかったことをうすうす、いや百も承知でも、民主主義のイデオロギーは、このフィクションにこだわらざるをえない。伝統や慣習に縛られた社会を喰ひ破って、民衆が社会の主人公になるのだという主張（市民革命の思想）を広めるのに、このフィクションは大いに役立った。民主主義への信念と、このフィクションは、表裏一体の関係にある。

制度の外側にあつて、制度を作ったり壊したりすることのできる民衆の意思。これをカール・シュミットは、憲法制定権力とよんだ。合法的手続きによらないで制度を改変する作用は、民主主義の観点では、暴力である。一切の暴力を政治のプロセスか

ら排除しようとした民主主義は、それを、制度の端緒にまつわるフィクションのなかに、閉じこめることになった。

いっぽう②の解決は、民主主義の誕生する以前に、民主主義の基礎を与える制度を認める点で、伝統主義に一步譲ったかたちになっている。革命（合法性の断絶）でなく、民主主義への合法的、連続的な移行。

そういうことは、あつてもよいが、必ずそうでなければならぬということはない。日本国憲法は、この②の構成をとっている。一九四七年から効力をもったこの憲法は、旧憲法（大日本帝国憲法）を改正するかたちになつていて、その合法的な連続性を担保する中心に、天皇がいる。天皇と民主主義との関係が、わが国の民主主義の、最

大の謎の部分だ。ここをどう解釈するかが、戦後の思想家にとって、大きな試金石になるだろう。

日本を占領し、その民主化をはかったアメリカは、深慮遠謀によつて、この選択をした（詳細は私の『冒険としての社会科学』毎日新聞社、を参照）。選択したのはアメリカだから、日本の民衆がこのシステムを、自覚的に選択したわけではない（急いでつけ加えると、それだからと言って、日本の民衆がこのシステムを支持していないわけではない）。ともかく、民主主義の初期条件をめぐって、不透明なわだかまりが残った。

抑圧的な民主主義

このように、「民衆がみんなで民主主義を作りました」と言うのは、フィクションではない。でも、だから民主主義はインチキだ、と反応するだけなら、あまりにも幼稚であらう。このフィクションには、政治の修羅場を数かぎりなくぐりぬけた、

現実的（リアリスティック）な大人の知恵が結晶しているのだ。

民主主義は、理想の天国でも極楽パラダイスでも何でもない。民主主義は、民衆の幸福を必ずしも保証しない。それはただ、民衆が被る苦痛や悲慘を最小限に喰いとめるための、ギリギリの工夫なのだ。

民主主義も、政治である。そして、どんな政治も、「全員を拘束する」という政治の本質から言って、抑圧的である。この意味の抑圧を、民主主義が無くしてしまえるわけではない。

民主主義が無くそうとしているのは、意思決定の合法性（手続的な正しさ）を踏みこじるあらゆる傾向、つまり、暴力である。民主主義の原則を貫くかぎり、そのシステムの内部で、暴力が大手をふってまかり通ることを防ぐことができる。それが、政治権力の前では絶対的な弱者である民衆のひとりひとりを守るために、必要なことなのだ。

民主主義も、暴力と無縁でありえない。

民主主義の制度を現実にかたちづくるには、国家をつくる必要がある（それ以外の方法は、いまのところ、知られていない）。そして、国家は、暴力を独占するところに成り立っているのだ。国家が暴力を独占するからこそ、その内部の政治のプロセスが、暴力と無関係に、民主主義の原則によって手続き合理的に運営できるわけである。

民主主義の特長は、だからこのように、抑圧／暴力を分離するところにこそある。抑圧と暴力が結合する最悪の政治形態を防ぐところにこそある。そうやって、社会のなかの一部の者が、残りの者たちに対して抑圧的かつ暴力的にふるまう可能性を、防止しているのである。人類はながい間、政治権力を恣意的にふり回すこの種の暴君に、苦しめられてきた。それに対して、ようやく近代社会がたどりついたさしあたりの解決が、民主主義なのである。民主主義には欠点も少なくないが、それでも、政治権力の暴走を喰いとめるための、もともと有効な政治制度であるのは確かだ。

苛酷な民主主義

民主主義をバラ色に描きすぎてはいけない。人間の作る制度である以上、民主主義も、そこそこのいい加減なものなのである。

実際に、民主主義を動かしてみると、あちこちでつじつまの合わない部分が出てくる。それを、めいめいが犠牲を払って、なんとか体裁をつくらうていく。民主主義はポンコツ自動車のようなものだ。乗り合わせた乗客が、あちこち修繕したり、後ろから押したりしないと、動かないのである。かと言って、これを乗り捨てようにも、ほかに適当な代わりの乗り物が見つからない。そんなものなのだ。

たかがこんな民主主義を守るために、極端な場合には、命を失わなければならぬ場合だってありうる。たとえば、ある日あなたが、無実の罪で逮捕されてしまった。裁判の結果、なんと死刑が確定。裁判も人間のやることだから、間違ふことだってあ

る。しかし、なにが事実かを最後に決めるのは裁判所だから、どうしようもない。手続きの正しさを最終根拠にすれば、多くの真実が埋もれてしまう。真実は、つと、ころにあるとわかっていても、手続き上正しい決定であれば、それに従わなければならない、という苛酷さを覚悟しておくべきなのだ。毒ニンジンの盃を仰いだソクラテス……。死刑になるあなたを、救うすべは誰にもない。

民主主義のもとで、人と人との関係は、制度的な手続きの枠組みを通じてしか決まっていけない。だから最低限、ああ誰それさんには有罪になったけれども、本当は違うかもわからないな、という留保を残しておくべきなのである。それが、民主主義を生きる人間の、最低限の思いやりというものである。

愚かな民主主義

さて、そういういい加減さにもかかわら

ず、そして、非能率であるにもかかわらず、民主主義は、他のどんな政治制度よりもすぐれている。なぜ、そう言えるのか。

民主主義の対抗馬には、いろいろありうるけれども、代表的なものとして、優れた少数者による政治をあげよう。優れた少数者による政治よりも、民主主義がなぜすぐれているかを、以下で述べたい。

民主主義では、誰でも同等な資格で、政治に参加する。いわば、素人の政治である。そのうちのある者は、政治に関心がなく、ある者は、教育がなくて、必要な情報を判断する能力を欠いており、ある者は、いちじるしい偏見やかたよった思想傾向をもっており、ある者は、頭が固くて、新しい考えについていけない、等々。これらの人びとが、討論を重ね、形式的な手続きにのっとりて意思決定をしたからといって、それが最善の選択だと言えるだろうか。それより、適性のある少数者（それは、テクノクラートであるかもしれないし、共産党であるかもしれないし……）が、民衆に代わつ

て、政治的判断を下したほうがよからう。民衆にとっても、よりよい状態（幸福）が実現されるはずだ……。

優れた少数者による政治は、だいたいこんな構造をもっている。そしてその言い分（民主主義は非能率で、しばしば誤った決定をし、……）も、根拠がないわけではない。決定の「質」だけを考えるなら、こういう政治もたしかにひとつのやり方だろう。

では民主主義は、愚かな大衆に政治の主導権をゆすり渡す、愚かな制度なのだろうか。

されど民主主義

民主主義は、政治制度として「安定」である。これは、少数者による政治に代えがたい利点だ、と私は思う。

少数者による政治を唱える人びとは言う。民衆は能力に欠ける。利己的である。騙されやすく、大勢順応的である……。かりにそれが事実であるとしても、それは一時的

なことではないのか。情報の流れに偏りがあるから。教育の普及に偏りがあるから。そういう基礎条件が変化してしまえば、少数者による政治はどう対応するのだろうか。

情報はいま、きわめて安価に大量に、地球大で流通するようになった。それと同時に、教育や所得の平準化を求める動きも、ずっと続いている。今後ますます、相対的に政治的権利を奪われている（と考えるであろう）民衆が、少数者に対して、民主主義の実現（民衆に対する権力の委譲）を求めて、運動をおこすのではないだろうか。

民主主義でない政治制度のもとでは、条件さえ整えばいつでも、民主主義を求める運動が起こる可能性がある。そして、こうした民主化運動が起こること（多数派となっていくこと）自体、その社会で民主主義を受け入れる条件が整ったことを意味するのだ。この運動が起こらないのは、もう民主主義を実現している場合だけである。民主化運動によってゆさぶられないという意味で、民主主義は安定している。

民主主義の強みは、政治にかかわる人びとのあいだに、一切の差別をもうけていない点である。ある意味でこれは、社会の実態にそぐわない。たとえば、海をまっ平らであると考えようなものだ。海というものは、いつでも波立っていて、決して平らではない。しかし、平均なり、長期的な趨勢なりをとれば、それは平らである。そうすることは間違っていない。同じように、民衆をまったく対等な大勢の人びとの集まりと考えることは、現実的な態度である。そして、もっと重要なことは、それが倫理的に正当化できる（誰からも文句のつけようがない）ということである。

情報がどのように伝わり、人びとがどれだけ真実を知ろうと、くつがえることのない政治制度。民衆の能力が向上すればするほど、本来の機能を発揮する政治制度。そういう成熟した制度、それほどまで安定した制度を、われわれは民主主義のほかに知らない。だから、民主主義こそ、他のどんな政治制度にもまして、すぐれているし、

維持する値打ちがあると思う。

ただし、残念なことがある。日本の（戦後）民主主義は、いくつかの理由によって、大変虚弱で体質の弱いものであること。そして、率直に言って、「民主主義を守ろう」とか「民主主義は大切だ」とか言ってまわっている思想家や団体に、ちっとも魅力がないこと。そういうイメージが民主主義にこびりついていて。だから、民主主義の肩を持つなんて、ちっともカッコウいいことではない。

けれども、われわれの民主主義を、せめてもう少しタフで成熟したものに変わっていくことが、いまの日本にとって重要だ。ちよつと考えてみると、そのことはよくわかると思う。もつと日本人は、おとなになろう。政治の責任を分かちあおう。そのため、に骨身を惜しまない人間が、何千万人も出てこない、日本はちっとも生きやすい社会になっていかない。そして、尊敬できる社会にもなっていないに違いない。

【愛は地球を救えるか？】

封建主義者の暴論

愛は陶醉し、愛は差別し、そして愛は地球を壊す！テロリズムとなる！

呉智英（封建主義者）

「愛は地球を救う」という感動的で有意義なテレビ番組があつて私も大好きなのですが、やはりこれだけ世の中が複雑になつてしまつと、すべての人びとが「愛」という普遍的かつ基本的な原理に立ち返つて、そこからもういちど出直すことも必要だと思つたりするのです——。

呉（笑）ちよつと待て。愛が「普遍的」で「基本的」な原理だなんて、いったい誰が決めたんだい？

——誰が決めたとおつしやられても困りま

すけど、やはり誰にでも人を愛するという気持ちはあるわけですし——。

呉 そうやつて「愛」をひとくりに語るところに、そもそも君の過ちがあるんだよ。漠然と人を愛すると言つたつて、男と女の「愛」と、人類愛とか博愛なんというときの「愛」は、まったく違うものだよ。だいたい「愛」なんて歴史的な概念なんだから、ちよつと普遍的じゃない。

愛、この偉大なる発明

——男と女の「愛」も、歴史的な概念だとおつしやるのですか？

呉 セニョーボスというフランスの歴史学者の名言に、「愛、この偉大なる十一世紀の発明」というのがあるそうよ。つまりヨーロッパでも、恋愛は近代の萌芽期に発明されたものなんだよ。男と女が対等な関係で愛しあうことが素晴らしいとか、いっさい